

中学生の内的作業モデルの変化と学校適応感との関連

粕谷 貴志*

The Relationship between Changes in Internal Working Models and Adaptation in Junior High School Students

Takashi KASUYA*

The study investigated the developmental changes in internal working models and the relationship between the changes and the adaptation in junior high school students. The questionnaire on internal working models and the two adaptation scales, satisfaction in school life and school morale were conducted to participants at pre and post during 9 months. These results showed that the degrees of “secure”, “anxious/ambivalent” and “avoidant” were relatively stable in 9 months. Positive correlation between the changes in internal working models and the adaptation scales were observed. These results were interpreted as indicating that the adaptation in school should be considered in guiding the students’ internal working models.

key words: attachment, internal working models, short-term longitudinal study, school adaptation, junior high school student

問題と目的

Bowlby (1973, 1980) は、アタッチメント理論の中で、乳幼児期からのアタッチメント対象とのかかわりの中で形成された「他者と自己の有効性に関する心的表象」として内的作業モデル (Internal Working Models: 以下 IWM と表記) の概念を提唱した。IWM とは、アタッチメント対象との具体的な経験の中で形成されたアタッチメント対象への近接可能性や、アタッチメント対象の情緒的応答性に関する表象および自分の他者への働きかけの有効性に関する表象モデルである。この表象モデルの差異により、個人のアタッチメントスタイルの違いが生じると考えられており、その特徴によってアタッチメントスタイルは安定、不安/アンビバレント、回避などのアタッチメントタイプとしてカテゴリー化される。

この IWM は、心的表象として内在化され、生涯にわたって個人の認知構造に影響を与え続ける可能性が指摘されており (Bowlby, 1988)、その後の研究において、それを支持する知見が提出されてきている。たとえば、Sroufe, Egeland, & Kreutzer (1990) は、乳幼児期に安定的な IWM を示した子供は、ある時期に不適応に陥ったとしても、小学校における適応が良好であることを明らかにしている。また、Grossmann & Grossmann (1991) は、乳幼児期に安定的な IWM を示していた場合、その後の親密な友人間関係をもちやすく、ネガティブな感情が生起する状況においても、他者を信頼して援助を求めていくことが容易であることを明らかにしている。IWM は、他者と自己に関する各個人の認知的枠組みとして働き、乳幼児期だけでなく、その後も対人的出来事の解釈や知覚、未来の予測、行動のプランニングに関与し、対人関係や社会適応に影響すると考えら

* 奈良教育大学

Nara University of Education, Takabatakecho, Nara-shi, Nara 630-8528, Japan

れている。

児童期から思春期においても IWM の個人差は、社会的有能さや学校適応、心理社会的適応との関連があることが指摘されている。Cohn (1990) は、小学校低学年の時期に母親へのアタッチメントが不安定型であった場合、教師から社会的に有能ではなく問題があると評定され、仲間からは攻撃的であると見られる傾向にあることを明らかにしている。本多 (2002) は、小学校高学年の児童の母親へのアタッチメントを測定し、共感、攻撃性、コンピテンス、対人不安傾向において、アタッチメントスタイルによる差異があることを示唆している。五十嵐・萩原 (2004) は、中学生を対象として、回想法により得られた幼少期の親へのアタッチメントタイプと不登校傾向との関連を指摘している。また、粕谷・河村 (2005a) は、中学生の IWM を測定し、安定型である場合、スクール・モラルが高く学校適応が良好である可能性を示唆している。IWM の個人差は、児童期、思春期において対人関係や学校適応に影響をあたえる要因であることが示唆されており、児童生徒の適応を援助するうえで考慮すべき重要な視点であると考えられる。

人生早期に形成された IWM は、後の修正や再評価に困難をきたすことが指摘され (Bowlby, 1982), IWM の個人差はある程度持続され、年齢が上がるにつれて、可塑性を減じ、安定性・固定性を増していくと考えられている。しかし同時に、Bowlby (1988) は、IWM の更新 (up-dating) の機能にも言及しており、情緒的コミュニケーションによる IWM の再構成の可能性を示唆している。長期縦断研究では、乳幼児期と成人期の IWM タイプの一致率は、安定型、不安/アンビバレント型、回避型の 3 タイプの分類において 64% であったことが報告されている (Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim, 2000)。また、IWM の再構成については、AAI (Adult Attachment Interview; Main, Kaplan, & Cassidy, 1985) における「獲得された自律性」タイプの存在からもその可能性が示されており、縦断研究によって IWM タイプの変容に言及した研究もみられる (例えば、山岸, 1997; Hamilton, 2000)。

IWM の形成にかかわるアタッチメント対象について Bowlby (1982) は、青年期になると、親に対するアタッチメントは変化し、親以外の大人や同年代

の友人などに対象が拡大することを指摘した。その後の研究では、児童期から思春期にかけて、アタッチメント対象が両親から友人へと徐々に移行することが明らかにされている (Zeifman & Hazan, 2008)。思春期において、学校における友人関係や集団適応が IWM の更新の要因となる可能性が推測される。IWM が、年齢が上がるにつれて可塑性を減じて変容が難しくなっていくとすれば、思春期における IWM の変容の様相とその要因を検討することは、思春期における IWM の変容の可能性を明らかにし、その変容に関連する要因についての示唆を得る意味で意義があると思われる。また、得られた知見は、IWM の視点から児童生徒の適応を援助するための重要な示唆を得ることにつながると考えられる。

本研究では、中学生を対象に IWM の短期縦断的变化の様相を把握し、その変化と友人関係や学級内での関係性などの学校適応に関する要因との関連を検討することが目的であった。

方 法

調査対象者

A 県および B 県の公立中学校の 1 年生から 3 年生 592 名に対して調査を実施した。内訳は、1 年生 188 名 (男子 102 名, 女子 86 名), 2 年生 195 名 (男子 106 名, 女子 89 名), 3 年生 209 名 (男子 90 名, 女子 119 名) であった。

調査時期

1 回目の調査は 2009 年 5 月, 2 回目の調査は 2010 年 2 月に実施された。

調査質問紙

学年、性別の基本属性および、2 回の調査でのデータの照合のためだけに用いることを説明し、組と出席番号の記入を求めた。その後、① IWM 尺度および、承諾の得られた学級のみ②学校生活満足度尺度、③スクール・モラル尺度に回答を求めた。

① IWM 尺度: 粕谷・河村 (2005b) の IWM 尺度 17 項目 (安定 6 項目, 不安/アンビバレント 6 項目, 回避 5 項目) を用いた。回答方法は、「あてはまる」(4 点) から「あてはまらない」(1 点) までの 4 件法であった。

②学校生活満足度尺度: 河村 (1999a) の学校生活満足度尺度 20 項目 (承認 10 項目, 被侵害 10 項目)

を用いた。回答方法は「とてもそう思う」(5点)から「全くそう思わない」(1点)までの5件法であった。

③スクール・モラル尺度：河村(1999b)のスクール・モラル尺度20項目(友人4項目, 学習4項目, 教師4項目, 学級4項目, 進路4項目)を用いた。回答方法は、「とてもそう思う」(5点)から「全くそう思わない」(1点)までの5件法であった。

調査手続き

各学級担任に調査を依頼し、学級ごとに集団で実施した。その際、調査実施前に対象生徒に対して、「学校の成績や本人の評価に一切関係がないこと」「答えたくない場合には、回答を中止してよいこと」「調査用紙を担任等、学校の先生が見ることはないこと」を説明することを依頼した。無記名で回答を求め、回答時間は、IWM尺度のみの学級は10分、学校生活満足度尺度および、スクール・モラル尺度を実施した学級は、20分から25分であった。

結 果

有効回答は、537名(有効回答率90.7%)であった。無効回答は、調査実施日に欠席していた生徒の未回収分と、項目の一部に回答のないものおよび、全項目に同じ選択肢を回答するなど著しく偏った回答をしているものであった。

IWMの変化の検討

IWM尺度の有効回答者537名のデータをもとに、因子分析を行った。その結果、先行研究(粕谷・河村, 2005b)同様の3因子構造が確認され、それぞれ安定因子、不安/アンビバレント因子、回避因子と考えられた。因子の項目の得点を合計してそれぞれ安定得点、不安/アンビバレント得点、回避得点

とした。1回目と2回目の調査における各因子の得点の学年別、男女別の平均と標準偏差および、分散分析結果はTable 1に示した。その結果、すべて交互作用は有意ではなく、不安/アンビバレント得点において1回目、2回目ともに性別の主効果が有意($F(1, 531)=27.80, p<.01$; $F(1, 531)=31.92, p<.01$)であり、男子より女子の得点が高い結果であった。また、一回目調査の回避得点において、学年の主効果が有意($F(2, 531)=4.58, p<.05$)であり、多重比較の結果、3年生が1年生、2年生より高い結果であった。

IWM尺度の各因子の得点をもとに、IWMのタイプを4タイプにカテゴリー化した。方法は、粕谷・河村(2005b)によった。具体的には、①「安定型」: 安定得点より、不安/アンビバレント得点と回避得点がともに低いタイプ、②「不安/アンビバレント型」: 安定得点より、不安/アンビバレント得点が高く回避得点は低いタイプ、③「回避型」: 安定得点より、回避得点が高く不安/アンビバレント得点は低いタイプ、④「不安定混在型」: 安定得点より、不安/アンビバレント得点と回避得点がともに高いタイプ。なお得点比較は、各下位尺度の項目数と分散の違いを考慮し、標準得点を用いた。

まず、IWM尺度の各因子の得点の変化の傾向を検討するために、尺度ごとに1回目と2回目の得点差を求めた。用いた式は(2回目の得点)-(1回目の得点)であり、差が正の値である場合に、安定得点ではプラス方向の変化、不安/アンビバレントおよび回避得点においては、マイナス方向の変化となる。学年別、男女別の平均、標準偏差および分散分析の結果はTable 2に示した。その結果、すべて交互作用は有意ではなく、不安/アンビバレント得点のみ学年の主効果が有意となり $F(2, 531)=3.06$,

Table 1 安定得点と不安/アンビバレント得点と回避得点の平均、標準偏差および学年、性別の要因による分散分析結果

	1年生		2年生		3年生		学年 F値	性別		交互作用 F値				
	男子 n=92	女子 n=77	男子 n=92	女子 n=80	男子 n=83	女子 n=113		F値						
安定得点	1回目	16.96 (3.70)	17.23 (3.17)	17.20 (3.29)	16.55 (3.43)	17.16 (3.60)	16.40 (2.86)	0.42	n.s.	1.68	n.s.	1.26	n.s.	
	2回目	17.03 (3.22)	17.71 (3.29)	16.97 (3.88)	16.43 (3.88)	16.89 (3.57)	16.59 (2.98)	2.05	n.s.	0.03	n.s.	1.49	n.s.	
不安/アンビバレント得点	1回目	13.00 (3.52)	14.40 (3.90)	13.41 (4.12)	14.69 (3.75)	13.16 (3.62)	15.58 (3.39)	1.45	n.s.	27.80	**	男<女	1.33	n.s.
	2回目	13.20 (3.84)	14.88 (3.94)	13.75 (4.47)	15.65 (3.64)	13.14 (3.77)	15.26 (3.51)	1.36	n.s.	31.92	**	男<女	0.14	n.s.
回避得点	1回目	8.65 (3.14)	8.52 (2.49)	8.62 (3.35)	8.20 (2.94)	8.99 (2.92)	9.65 (3.21)	4.58	*	1年・2年<3年	0.02	n.s.	1.54	n.s.
	2回目	8.66 (3.11)	8.60 (2.71)	8.24 (3.04)	8.40 (3.01)	8.67 (2.68)	9.26 (3.21)	2.12	n.s.	0.75	n.s.	0.55	n.s.	

()内は標準偏差, *: $p<.05$ **: $p<.01, n=537$

Table 2 安定得点と不安／アンビバレント得点と回避得点変化の平均，標準偏差および学年，性別の要因による分散分析結果

	1年生		2年生		3年生		学年	F値	性別	交互作用
	男子 n=92	女子 n=77	男子 n=92	女子 n=80	男子 n=83	女子 n=113				
安定得点	0.08 (2.94)	0.48 (3.15)	-0.23 (2.88)	-0.13 (2.62)	-0.27 (2.57)	0.19 (1.99)	1.28 n.s.	1.91 n.s.	0.23 n.s.	
不安／アンビバレント得点	0.20 (3.89)	0.48 (3.77)	0.34 (3.17)	0.96 (2.63)	-0.01 (3.05)	-0.33 (2.55)	3.06 *	2年>3年	0.51 n.s. 1.02 n.s.	
回避得点	0.01 (3.21)	0.08 (2.77)	-0.38 (2.60)	0.20 (2.66)	-0.31 (2.70)	-0.39 (2.65)	0.96 n.s.	0.62 n.s.	0.69 n.s.	

()内は標準偏差，*: $p < .05$, $n = 537$

Table 3 IWM タイプごとの出現数

	1回目	2回目
安定型	198 (36.9)	216 (40.2)
不安／アンビバレント型	64 (11.9)	56 (10.4)
回避型	65 (12.1)	58 (10.8)
混在型	210 (39.1)	207 (38.5)

()内は%， $n = 537$

$p < .05$), 多重比較の結果, 3年生より2年生の変化が大きいうちの結果であった。また, 安定得点の変化の平均, 不安／アンビバレント得点の変化の平均, 回避得点の変化の平均は, すべて1点未満の値であった。

次に, 1回目と2回目のIWMタイプの出現数を比較した。その結果, 各IWMタイプにおける1回目と2回目の変化は, 3名から18名の範囲であった (Table 3)。次に, 1回目と2回目のIWMタイプの変化カテゴリーごとに集計をおこなった。その結果, 全体の61.4%においてIWMタイプの変化が見られなかった。安定型と不安定型 (不安／アンビバレント型, 回避型, 不安定混在型) の2つのカテゴリーで見たときには, 76.5%が同じカテゴリーで変化がないという結果であった。また, IWMタイプの変化があったもののうち, 15.1%が不安定型間の変化, 13.4%が不安定型から安定型への変化, 10.1%が安定型から不安定型への変化であった (Table 4)。

IWM各因子の得点変化と学校適応感との関連の検討

IWMの変化と学校適応感との関連を検討するために, 1回目と2回目の学校生活満足度尺度および, スクール・モラル尺度に回答が得られた114名 (男子60名, 女子54名) を対象に, IWM各因子の得点変化および, 学校生活満足度尺度各因子の

得点変化を求め, 両者の相関を検討した。その結果, 承認得点の変化と安定得点の変化に弱い正の相関 (.330) が見られた。また, 被侵害得点の変化と不安／アンビバレント得点の変化に弱い正の相関 (.324) が見られた。また, 被侵害得点の変化と回避得点の変化の相関は有意であったが値は小さく, ほとんど相関はないという結果 (.193) であった (Table 5)。次に, 1回目と2回目のスクール・モラル尺度各因子の得点変化を求め, IWM各因子の得点変化との相関を求めた。その結果, 友人得点の変化は, 安定得点の変化と弱い正の相関 (.396), 不安／アンビバレント得点の変化と弱い負の相関 (-.257) が見られた。また, 学級得点の変化は, 安定得点の変化と弱い正の相関 (.339), 不安／アンビバレント得点の変化と弱い負の相関 (-.382) が見られた。さらに, 教師得点の変化は安定得点と, 学習得点の変化は不安／アンビバレント得点と, それぞれ相関は有意であったが値は小さくほとんど相関はないという結果 (.188, .198) であった (Table 6)。

IWMタイプの変化ケースの検討

IWMの変化の実際および, IWMの変化と変化に関連する要因とのかかわりをより明らかにするために, 個別のIWMの変化の様相を検討した。1回目と2回目の学校生活満足度尺度および, スクール・モラル尺度に回答が得られた生徒のうち, IWMタイプが不安定混在型から安定型に変化した7名のIWM各因子, 学級満足度尺度各因子, スクール・モラル尺度各因子の得点変化を検討した (Table 7)。その結果, 安定得点の変化はケースAにおいて11と大きかったが, 他のケースは変化が比較的小さい値であった。不安／アンビバレント得点および回避得点は, ケースによって差が見られるものの, 安定得点に比べて変化が大きい傾向が見られた。今回の調査で不安定混在型から安定型へと変化

Table 4 IWM タイプの変化カテゴリおよび変化タイプごとの出現数

カテゴリ	変化タイプ	出現数	カテゴリ合計
変化なし	安定→安定	144 (26.8)	330 (61)
	不安／アンビバレント→不安／アンビバレント	24 (4.5)	
	回避→回避	20 (3.7)	
	混在→混在	142 (26.4)	
変化あり (不安定型→不安定型)	不安／アンビバレント→回避	3 (0.6)	81 (15)
	不安／アンビバレント→混在	22 (4.1)	
	回避→不安／アンビバレント	3 (0.6)	
	回避→混在	21 (3.9)	
	混在→不安／アンビバレント	12 (2.2)	
	混在→回避	20 (3.7)	
変化あり (不安定型→安定型)	不安／アンビバレント→安定	15 (2.8)	72 (13)
	回避→安定	21 (3.9)	
	混在→安定	36 (6.7)	
変化あり (安定型→不安定型)	安定→不安／アンビバレント	17 (3.2)	54 (10.1)
	安定→回避	15 (2.8)	
	安定→混在	22 (4.1)	

()内は%, n=537

Table 5 WM 各因子の得点変化と承認および被侵害因子の得点変化との偏相関

	承認得点	被侵害得点
安定得点	.330**	.022
不安／アンビバレント得点	-.118	.324**
回避得点	-.128	.193*

*: $p < .05$ **: $p < .01$, 偏相関係数は学年と性別の要因を統制して求めた。n=114

したケースでは、安定得点の増加によって安定因子が優勢となったというより、不安／アンビバレント得点および、回避得点が減少したことにより、相対的に安定因子が優勢となり、IWM タイプが安定型に変化したケースが多く見られた。

また、学校生活満足度尺度および、スクール・モラル尺度の得点変化との関連では、安定得点(+11)が比較的大きく増加したケースAでは、他のケースと比べて、承認得点(+23)、被侵害得点(-19)、友人得点(+7)、学級得点(+12)の変化が比較的大きい傾向が見られた。また、ケースBでは、不安／アンビバレント得点(-6)と回避得点(-4)の減少と被侵害得点(-15)の比較的大きな減少が同時に見られた。ケースCにおいては、不安／アンビバレント得点(-7)の比較的大きな減少と承認得点(+5)の増加が同時に見られた。それ以

外のケースでは、IWM 各因子の得点変化と有意な相関が見られた承認得点、被侵害得点、友人得点、学級得点においても、変化はいずれも3以下であり、大きな変化ではなかった。

次に、1回目と2回目の学校生活満足度尺度および、スクール・モラル尺度に回答が得られている生徒のうち、IWM タイプが安定型から不安定混在型に変化した5名のIWM 各因子、学校生活満足度尺度各因子、スクール・モラル尺度各因子の得点変化を検討した(Table 8)。その結果、5ケースとも安定得点の減少が見られた。不安／アンビバレント得点は、5ケース中3ケースで増加、回避得点は、5ケース中4ケースで増加していた。今回の調査で安定型から不安定混在型へと変化したケースでは、安定得点の減少と同時に、不安／アンビバレント得点、回避得点のどちらか、または両方の増加が見られた。また、学校生活満足度尺度および、スクール・モラル尺度の得点変化との関連では、ケースH, I, Kにおいて、被侵害得点の増加(+5, +12, +4)と安定得点の減少(-4, -7, -6)が大い傾向が見られた。また、承認得点の減少(-21)と友人得点(-12)の減少が比較的大きかったケースLにおいても安定得点(-4)の減少が見られた。

Table 6 IWM 各因子の得点変化とスクール・モラル各因子の得点変化との偏相関

	友人	学習	教師	学級	進路
安定得点	.396**	.122	.188*	.339**	-.094
不安/アンビバレント得点	-.257**	.198*	.072	-.382**	.027
回避得点	-.155	.086	-.029	-.179†	.066

†: $p < .10$ *: $p < .05$ **: $p < .01$, 偏相関係数は学年と性別の要因を統制して求めた。 $n = 114$

Table 7 「混在型→安定型」ケースの IWM 各因子および学級満足度各因子, スクール・モラル各因子の 1 回目得点と変化

学年・性別	安定	不安/ アンビバレント	回避	承認	被侵害	友人	学習	教師	学級	進路
A 1年生・女子	6 (11)	19 (-7)	14 (-8)	18 (23)	39 (-19)	11 (7)	14 (-1)	9 (1)	7 (12)	16 (4)
B 2年生・男子	20 (2)	18 (-6)	16 (-4)	49 (-16)	31 (-15)	20 (0)	19 (0)	18 (-6)	20 (-2)	20 (0)
C 2年生・男子	17 (-1)	16 (-7)	10 (-3)	44 (5)	11 (0)	20 (0)	15 (0)	16 (4)	20 (0)	14 (6)
D 2年生・男子	14 (2)	12 (-2)	8 (-1)	33 (3)	12 (-1)	17 (0)	17 (-1)	15 (-1)	19 (0)	19 (0)
E 3年生・女子	20 (-3)	19 (-5)	12 (-6)	48 (-1)	10 (3)	20 (-2)	19 (0)	19 (-1)	20 (-1)	19 (-2)
F 3年生・男子	17 (1)	16 (-2)	10 (-5)	33 (1)	20 (1)	20 (-1)	13 (0)	16 (0)	15 (2)	18 (-4)
G 3年生・女子	17 (1)	17 (-5)	9 (-2)	49 (-1)	17 (0)	18 (0)	17 (0)	14 (2)	16 (3)	14 (1)

()内は得点の変化量。

各因子の得点範囲は, 安定, 不安/アンビバレント: 6-24, 回避: 5-20, 承認, 被侵害: 10-50, 友人, 学習, 教師, 学級, 進路: 4-20。

Table 8 「安定型→混在型」ケースの IWM 各因子および学級満足度各因子, スクール・モラル各因子の 1 回目得点と変化

学年・性別	安定	不安/ アンビバレント	回避	承認	被侵害	友人	学習	教師	学級	進路
H 1年生・男子	20 (-4)	12 (4)	7 (5)	33 (0)	22 (5)	18 (-1)	18 (-2)	11 (0)	15 (-1)	18 (-1)
I 2年生・男子	20 (-7)	13 (-1)	8 (-2)	42 (-1)	12 (12)	17 (0)	18 (0)	13 (4)	14 (2)	12 (4)
J 2年生・女子	18 (-2)	14 (0)	6 (7)	42 (4)	14 (-3)	19 (1)	18 (2)	16 (3)	16 (3)	17 (1)
K 2年生・女子	22 (-6)	18 (1)	5 (5)	37 (3)	26 (4)	19 (-2)	18 (-1)	20 (-1)	20 (-2)	17 (0)
L 3年生・女子	20 (-4)	16 (4)	10 (2)	36 (-21)	34 (-4)	19 (-12)	14 (-1)	14 (3)	14 (-2)	15 (-3)

()内は得点の変化量。

各因子の得点範囲は, 安定, 不安/アンビバレント: 6-24, 回避: 5-20, 承認, 被侵害: 10-50, 友人, 学習, 教師, 学級, 進路: 4-20。

考 察

本研究の目的は, 中学生の IWM の短期縦断的变化の様相を把握し, その変化と学校適応との関連を検討することであった。

IWM 尺度結果

IWM 各因子の得点平均と標準偏差からは, 不安/アンビバレント得点に性差が見られた。これは, 同じ尺度をつかった先行研究(粕谷・河村, 2005a, 2005b, 2006)において, 男子より女子の不安/アンビバレント得点が有意に高い結果が得られ

ていることと同様の傾向であった。また, 各因子の得点平均と標準偏差の値についても, 先行研究(粕谷・河村, 2005a, 2005b, 2006)と, 得られた数値および分散においてほぼ同じ傾向がみられた。

IWM 各因子と IWM タイプの短期縦断的变化

1 回目と 2 回目の調査における IWM 各因子の得点平均の比較では, IWM 各因子の得点の変化は小さな値にとどまり, 標準偏差から判断してある程度の分散が認められるものの, 比較的安定性があることが明らかになった。また, IWM タイプにおいても, 1 回目と 2 回目の調査において IWM タイプの

出現数は、大きな変化は見られず (Table 3)、6割以上がIWMタイプ間の移行がないという結果であり、これを安定型と不安定型の2つのカテゴリーで見た場合には、7割以上がカテゴリー間の移行はないという結果であった。これらの結果から、中学生のIWMは、9カ月間という短期間では、比較的安定した傾向であると考えられた。アタッチメントの連続性については、乳幼児期から青年期にわたる長期縦断研究によって一定の連続性を示す結果 (Waters, et al., 2000; Hamilton, 2000) が報告されており、本研究の思春期の短期的な検討においても同様の傾向が示されたいえる。アタッチメントの連続性は、IWMの固定的性質だけでなく、その後の環境や養育態度に連続性があることによる影響の可能性が指摘されており (安藤・遠藤, 2005)、思春期においても、IWMの個人差が友人関係や学校適応といった個人を取り巻く環境の連続性に影響することや、親との関係や養育態度の連続性が、IWMの変化が小さい安定した傾向につながっている可能性が考えられる。

一方、2割程度ではあるが、9カ月間の短期間で安定型と不安定型のカテゴリー間を移行したケースが存在することが明らかになり、IWMタイプが変化することが示唆される結果であった。長期縦断研究において、環境要因によってはアタッチメントの連続性が見出されないという (Weinfeld, Sroufe, & Egeland, 2000) 研究結果もあり、IWMに影響をもつような何らかの環境要因の変化によっては、思春期において、IWMタイプが変化することが示唆されたといえよう。

IWMの変化と学校適応感の関連

IWM各因子の得点変化と学校生活満足度尺度各因子の得点変化との相関を検討した結果、承認因子が安定因子と、被侵害因子が不安／アンビバレント因子と正方向の関連があるという結果が得られた。これらの結果から、学級内で認められ居場所があるという認知を反映する承認因子は、安定因子を強める可能性が示唆された。また、学級の仲間からの悪ふざけや冷やか、孤立などの認知を反映する被侵害因子が、不安／アンビバレント因子を強める可能性が示唆された。また、IWM各因子の得点変化とスクール・モラル各因子の得点変化との相関を検討した結果から、友人と学級に関するモラルの向

上が、安定得点の向上と不安／アンビバレント得点の減少に関連することが示された。気軽に話ができることや遊びに誘ってくれる友人がいて良好な友人関係をもつことが、安定因子を強め、不安／アンビバレント因子を弱める可能性が示唆された。また、所属する学級に居ると安心できることや学級について明るく楽しく協力し合っていると感じることができ環境が、安定因子を強め、不安／アンビバレント因子を弱める可能性が示唆された。Zeifman & Hazan (2008) は、アタッチメント対象の移行を調査し、6歳から17歳のすべての年齢で近接欲求を向ける相手は友人であること、安全な避難場所の対象について8歳から14歳までに両親から友人への移行すること、安全基地、分離抵抗の対象についても15歳から17歳になると友人に移行することを指摘している。また、村上・櫻井 (2014) は、小学4年生から6年生において、発達とともにアタッチメント・ネットワーク内における友達の重要性が、両親の重要性と比較して高まることを明らかにしている。本研究においては、承認、被侵害、友人、学級の各因子が、IWM各因子の変化と関連が見られた。これは、思春期に入りアタッチメント対象が親から同年代の親しい友人へと変化しつつあることが、学級集団内での関係性や友人関係の要因がIWMの変化と関連することにつながった可能性を窺わせる結果である。アタッチメント対象の移行が始まる児童期から思春期においては、学級集団内での関係性や友人関係などが、IWMの変容を促す要因となり得る可能性が示唆されたといえよう。

IWMタイプ変化ケースの検討

IWMタイプが不安定混在型から安定型に変化した7ケースと安定型から不安定混在型に変化した5ケースを対象に、IWM各因子の得点変化と学校生活満足度尺度およびスクール・モラル尺度各因子の得点の変化を検討した結果、承認因子、被侵害因子、友人因子、学級因子の変化がIWM各因子の変化と関連する傾向が支持される結果が得られた。

不安定混在型から安定型への移行については、承認因子、被侵害因子、友人因子、学級因子の得点変化が見られたケースと、それらの得点の変化が比較的小さいケースの両方が見られた。得点変化が少ないケースは、1回目の調査時から得点が高く (被侵害得点については低く)、もともと承認、被侵害、

友人、学級の領域が良好である傾向がみられた。IWMの変化には、それらの得点変化だけでなく、それらの因子における学校適応が良好な状態である環境が関連することが推測された。また、安定型から不安定混在型への移行については、承認得点と友人得点の減少や被侵害得点の増加が安定得点の減少につながったと考えられるケースが見られた。安定型から不安定混在型への変化においては、友人関係や集団内の関係における何らかの出来事や変化と関連することが窺われる結果であると考えられた。

これらの結果は、比較的顕著なIWMの変化のケースにおける少数の事例から得られた知見ではあるが、思春期のIWMの変化において、学級集団内での関係性や友人関係の要因が関連することを支持する結果であると考えられる。また、IWM各因子の変容に関わる影響が、それぞれのケースによって異なることが明らかになり、IWMの変容を促す援助においては、生徒個人の状態に合った環境の要因がIWMの変化と関連することを考慮することが必要であると考えられた。

さらに、抽出したケースの中には、今回、IWMの変化に関連がある可能性が示唆されている承認因子、被侵害因子、友人因子、学級因子の得点の変化が明確ではないケースもあり、学校での要因だけでなく、養育者との関係や家庭環境などの要因が関与した可能性が考えられた。児童期、青年期にかけて、アタッチメント対象が母親や父親などの家庭内の対人関係から、友人などの関係に拡大していくこと(Ziefman & Hazan, 2008; 村上・櫻井, 2014)を考えると、アタッチメント対象が誰であるかによって、学校環境の影響が異なる可能性が考えられた。

心理教育的援助の視点

中学生における9カ月間の短期的なIWMの変化は、全体としては比較的变化が少なく安定的な傾向が見られたものの、個別に見ると、大きく変容しているケースも見られた。また、その要因として、学級内での承認や被侵害および、友人、学級のモラルとの関係が明らかになった。これらの結果からは、中学生のIWMの変容を促す心理教育的な援助においては、学級集団内の仲間からの承認が得られるような良好な集団の関係性を育てることや、いじめなどが発生しない集団規律を育てる学級づくりがその基盤となることが示唆された。

また、友人や学級のモラルが高まるような人間関係づくりや集団活動を生かした行事への取り組みなどの特別活動を充実させることも有効であると考えられる。その際、不安定型のIWMは、友人からソーシャル・スキルが欠けていると評価される傾向と関連があること(Kobak & Sceery, 1988)や不安定型のIWMはソーシャル・スキルの遂行の不全と関連があること(粕谷・河村, 2006)を考慮すると、援助対象の生徒のIWMのアセスメントにもとづいた適切なソーシャル・スキルへの介入が、人間関係づくりや集団活動を生かした取り組みの効果を上げるために必要となるであろう。

さらに、アタッチメント対象によって、IWMの変化に関連する要因が異なる可能性が示唆されていることから、IWMの変容を促す心理教育的援助では、生徒のIWMのタイプおよび、アタッチメント対象のアセスメントにもとづいて、アタッチメントの個人差に応じた介入を検討していく必要があると考えられる。

今後の課題

本研究では、9カ月間という短期間における2回の調査による変化の検討にとどまっている。継続して長期縦断的にデータを収集し変化の様相を詳しく検討をしていくことが課題となる。次に、本研究では、IWMの変化の要因として学校環境のみに焦点をあてた検討であった。今後、家庭環境やライフイベントなどの要因との検討をおこなっていくことが課題である。また、思春期においては、環境の要因と同時にアタッチメント対象の移行の個人差の要因も含めた検討をしていく必要があると考えられた。

引用文献

- 安藤智子・遠藤利彦 2005 青年期・成人期のアタッチメント アタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編著) ミネルヴァ書房 pp.127-173.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎他(訳) 1977 母子関係の理論2: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss: Vol. 3. Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか(訳) 1981 母子関係の理論3: 愛着喪失 岩崎学術出版社)

- Bowlby, J. 1982 *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 1991 母子関係の理論 1: 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1988 *A Secure Base: Clinical Applications of Attachment Theory*. London: Routledge.
- Cohn, D. A. 1990 Child-mother attachment of 6-years-olds and social competence at school. *Child Development*, **61**, 152-162.
- Grossmann, K. E., & Grossmann, K. 1991 Attachment quality as an organizer of emotional and behavioral responses in a longitudinal perspective. In C. M. Parker, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment Across the Life Cycle*. Routledge, pp. 93-114.
- Hamilton, C. E. 2000 Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, **71**, 690-694.
- 本多潤子 2002 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成 カウンセリング研究, **35**, 246-253.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, **52**, 264-276.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2005a 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 カウンセリング研究, **38**, 206-215.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2005b 中学生の内的作業モデル把握の試み—尺度の信頼性・妥当性の検討— カウンセリング研究, **38**, 141-148.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2006 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連 カウンセリング研究, **39**, 124-131.
- 河村茂雄 1999a 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1)—学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成— カウンセリング研究, **32**, 274-282.
- 河村茂雄 1999b 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (2)—スクール・モラル尺度 (中学生用) の作成— カウンセリング研究, **32**, 283-291.
- Kobak, R. R., & Sceery, A. 1988 Attachment in adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, **59**, 135-146.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to representation. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points in Attachment Theory and Research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 66-104.
- 村上達也・櫻井茂男 2014 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討—児童用アタッチメント機能尺度を作成して— 教育心理学研究, **62**, 24-37.
- Sroufe, L. A., Egeland, B., & Kreutzer, T. 1990 The Fate of early experience following developmental change: Longitudinal approaches to individual adaptation in childhood. *Child Development*, **61**, 1363-1373.
- Waters, E., Merrick, S. K., Treboux, D., Crowell, J. A., & Albersheim, L. 2000 Attachment security from infancy to early adulthood: A 20-year longitudinal study. *Child Development*, **71**, 684-689.
- Weinfeld, N., Sroufe, L. A., & Egeland, B. 2000 Attachment from infancy to early adulthood in a high risk sample: Continuity, discontinuity and their correlates. *Child Development*, **71**, 695-702.
- 山岸明子 1997 青年後期から成人期初期の内的作業モデル—縦断的研究— 発達心理学研究, **8**, 206-217.
- Zeifman, D., & Hazan, C. 2008 Pair bonds as attachments reevaluating the evidence. In J. Cassidy, & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment Second Edition*. New York: The Guilford Press, pp. 436-455.

(受稿：2015.6.20; 受理：2016.2.19)